



<b>Title</b>	All things considered, should feminists embrace basic income?
<b>Authors(s)</b>	Baker, John
<b>Publication date</b>	2011
<b>Publication information</b>	Baker John. "All things considered, should feminists embrace basic income?," 2011.
<b>Item record/more information</b>	<a href="http://hdl.handle.net/10197/3200">http://hdl.handle.net/10197/3200</a>
<b>Notes</b>	Japanese version of Baker, J. (2008) 'All things considered, should feminists embrace basic income?'. Basic Income Studies, 3 (3). Translated by Takeshi Suzuki.

Downloaded 2026-04-30 02:29:44

The UCD community has made this article openly available. Please share how this access benefits you. Your story matters! (@ucd\_oa)



© Some rights reserved. For more information

## フェミニストはベーシックインカムを歓迎すべきか？

- ベーシックインカム、ジェンダー的公正とジェンダー対等なライフスタイルのコスト  
アンカ・ゲアウシュ（オックスフォード大学社会正義研究センター）
- すべてを勘案して、フェミニストはベーシックインカムを歓迎すべきか？  
ジョン・ベイカー（ダブリン大学、平等性研究センター）

本稿は、インターネット上で展開されている、ベーシックインカム研究者のフォーラム (Basic Income Studies) の特集「フェミニズムはベーシックインカムを支持すべきか」( "Should Feminism Endorse basic Income?" guest-edited by Ingrid Robeyns in <http://www.bepress.com/bis/> Vol. 3 (3), Dec. 2008 から、対照的と思われる2点の邦訳を紹介するものです。

### ベーシックインカム、ジェンダー的公正と ジェンダー対等なライフスタイルのコスト

アンカ・ゲアウシュ  
(オックスフォード大学社会正義研究センター)

世界中の社会は、政治・経済・教育上の到達点という観点からは、男女間での顕著なギャップ、もっとも性差に根ざした有償・無償という労働の区分によって特徴づけられている。加えて、女性と女性らしさは、文化的にも低く見られており、この低評価は個人の心理のレベルに深く根ざしている。フェミニストは、ベーシックインカム (BI) の導入を、ジェンダーとの関係において、女性の生活における解放の力として歓迎すべきなのだろうか？ それは、ジェンダー的公正を究極的に促進するものだろうか？ (ベーシックインカムも含めて) どのような所得分配制度の導入であれ、女性の助けとなり、少なくともジェンダーに結びついた経済的不公正のいくつかを是正するとだろうと、一目で信じる理由がある。しかしまた、そのような政策が女性の [労働] 市場へのアクセスの妨げになる、少なくともある範囲の女性を、西側の諸国での現状よりも高い程度で家庭内に閉じ込める、そして究極的には、公正に反する性差的規範と期待の永久化につながらないか、という懸

き、(働いていないか、パート勤務である)配偶者が大きく担う家庭を持つことができている。しかし、家族とともに良質の時間を過ごすことができることは、家庭をもつことの中心的な価値なのであり、たんに「家庭に愛する人がいる」という事実ではない。男性は、文化と市場の期待に適合することによって、重要なものを失っているのである。

訳注<sup>(\*\*\*)</sup> 「ジェンダー的公正」とは、人はその性を原因として生活が困窮してはならないという考え方であり、自由主義的な公正さには、個人は自らのライフスタイルを自由に選択できるべきであるので、その選択の集合の影響は、結局のところ、ある性にとって、異なった(もしかすると、より悪い)機会のひと揃いに結果する可能性がある、という条項を含む(原著者のコメントによる)。

---

## すべてを勘案して、フェミニストは ベーシックインカムを歓迎すべきか？

ジョン・ベイカー  
(ダブリン大学、平等性研究センター)

### 概要

フェミニストの一人として筆者は、尊重と承認、資源、愛・ケアと連帯、権力、仕事と学習などにかかわる、多次元的な定義における男女間の条件の平等性の問題にかかわってきた。平等主義者にとっての中心的な問題は、ケア作業の承認、評価、支援が労働の性別分離を助長する恐れがあることである。ベーシックインカム問題以上になりに広範な課題を含む問題である。しかし筆者は、ベーシックインカムは、価値がありながら商品化できない活動としてケア作業を認識し、支援するものとして解釈することができ、ベーシックインカムは、労働の文化的・思想的な分離と対峙することと結合されるべきであると主張する。アイルランドにおけるケアの提供者と受け手に関する、最近の経験的な研究を引証しつつ論じるものである。

### キーワード

ベーシックインカム、ケア作業の分離、平等性、フェミニズム

フェミニズムの中心的な原理は、筆者が理解し容認するところでは、男女間の平等性である。この平等性とは、もちろん、男性の規範に女性を同化することではなく、人間の多様

性を受け入れ尊重するという文脈において、規範における性差の全体を解消することである。平等性それ自体は、多様な概念化が可能である。筆者自身は、万人に対して平等に可能性を与え、力を与えることとおおまかに理解される、「条件の平等性」の理念に傾倒している。筆者と同僚は、「条件の平等性」について、次の5つの次元に関して特徴づけた。(baker 他、2004年)

1) 尊重と承認 2) 資源 3) 愛、ケア、連帯 4) 権力 5) 労働と学習

筆者らは、重要な社会システム全体にわたる平等性を重視する。経済、政治、文化、感情のシステムである。この最後のシステム（感情）は、社会がその成員の、愛・ケア・連帯のニーズと「感情面のニーズ」を満たすことも、失望させることもできるように組織される方法である。これらのニーズのなかには、市場を通じて満たされるものもあるが、他の多くは、感情を伴った仕事の形を要求する。愛とケアという関係の特定性、そうした関係性に根ざした動機づけであるために、商品化が不可能であり、また商品化という方法は、その価値を損なうものとなる。

本論において筆者は、情動上の平等性に焦点を合わせる。すなわち、情動システムのなかで生じる不平等性の問題である。そのもっとも中心的な問題は、人々が経験する愛とケアにおける不平等、こうした関係の維持に関わる仕事における不平等、そのような仕事が認識、評価され、他の仕事との比較において物的に報われる程度における不平等である。情動的關係には、権力における重要な不平等も含まれる。

## 1. 目標としての情動上の平等

我々が住む世界では、多くの人々の情動上のニーズが無視され、愛とケアとはまさに反対のものを経験している。平等な世界は、すべての人ためにこのようなニーズを満たすことめざすものである。個人的な関係の維持を含めた広い意味でのケア作業は、そのような世界において必要な特性であり、人間のニーズを満たすに不可欠なものである。現状では、この仕事は、労働の性別分離によって支配されており、ケア作業の大部分は女性が担っている。同時に、それは過少認識され、過少評価され、物的なサポートもほとんど与えられていない。ケア作業をめぐる権力の不平等自体が、労働の性別分離、認識と物的サポートの欠落に由来しているのである。すなわち、女性がケア作業を担うべきだという大きな社会的・道徳的なプレッシャー、伝統的な「男が稼ぎ手」世帯における男性の女性に対して振るう権力である。人々の愛とケアへのアクセスにおける多くの不平等もまた、これらの要素に由来している。すなわち、労働の性別分離は、ケアの積極的な側面への男性のアクセスを拒絶することによって、多くの男性のケアのニーズ実現を妨げ、ケアの認識欠如が、ケア提供者としての役割のなかで自身がケアされる必要のある多くの女性のニーズの実現を妨げているのである。条件の平等性はそれ故、ケア作業が認識され、評価され、サポートされるべきであること、男女の間で平等に分かち合われることを必要とする。

ともかくベーシックインカムを検討する前に、平等性という諸目的の間の潜在的な矛盾を見極めることができる。すなわち、よりいっそうの認識、評価、サポートを与える試みは、性別分離労働を補強するリスクがあることである。それは、性別分離労働における女性の位置をより我慢できるものにするかも知れないからである。そのような試みは、女性がそのような性別分離労働を嫌い、象徴的により評価され物的により報われる、他の仕事に従事したくなる重要な理由を取り除くかも知れないのである。しかし、この矛盾は本来的なものではない。フレイザーが「普遍的ケア提供者」モデルと呼んだ（1997年）方向に沿って、ケア作業が評価され、分かち合われる世界をイメージすることは完全に可能である。性別分離労働を遺棄する機会、ケア作業を再評価することによって増加する可能性がある。それは、男性がそれに従事するコストを低減するだろうからである。<sup>(1)</sup>

原注<sup>(1)</sup> それぞれだけの違いを生むかには疑問が残る。男性はケア作業をすることにおいて女性よりも既により認識を受けているからである（Lynch 他、近刊予定）。

## 2. 情動上の平等を促進するうえでのベーシックインカムの役割

ベーシックインカムは、情動上の平等のすべてに、どれだけ合致するのだろうか？ 一見したところでは、簡単ではない。正確には、それは普遍的であるので、ケア作業を認識、評価、サポートする役割を果たすようには見えないのである（Krebs 2000、Robeyns 2001a）。ケア作業に関わっているかどうかにかかわらず、それは理解されるであろう。見かけ上は、ケア提供者を対象としたベーシックインカム、あるいはより一般的に、ケア作業を社会参加の価値ある方法の一つと認める「参加所得」制度は、より良いかも知れない。しかし、この議論は急ぎ過ぎである。第1に、そのような制度のマイナス面を無視している。資力調査付き給付と違って、「参加所得」は受給者を辱めることがないが、非受給者を辱めることが確実である。その多くは、役所的規則には反映されないような、見えにくくどこにもある形のケア作業に従事している人々である（Pateman, 2004）。誰かが「参加所得」受給の資格があるかどうかの評価に関わる官僚的な調査は、それ自体、我々が抵抗すべき権力の不平等である（De Wispelaere & Stirton, 2007）。さらに、伝統的な世帯においては、「参加所得」は、ケアは女性の「義務」であるという考え方を補強し、ケア作業からの男性の撤退を正当化するであろう（Pateman, 2004）。まさにベーシックインカムは職業について無条件であるので、ケア作業への「支払い」としてではなく、ケア作業への普遍的な「サポート」となり、すべての人に（労働市場からの部分的な撤退であれ、完全な撤退であれ）ケア作業に関わる、より効果的な機会を与えることとなる。同時に「参加所得」制度は、ほぼすべての人が社会にとってそれを支持するのが正当化できる価値のある範囲の活動に参加していることを前提としている。従って、ベーシックインカムがケア作業の価

値の認識に影響しないというのは間違いである。反対に、ベーシックインカムは、人々が参加でき、物的にサポートされるに値する、(とくに)商品化できない範囲の活動の一つとして、ケア作業を認識する (Mckay, 2001)。ベーシックインカムがこのように理解されるかどうかは、それが公の議論(それ自体、広い思想的状況に依存する)において組み立てられるかどうかにかかっている。

ベーシックインカムの議論でめったに触れられないもう一つの要素は、その制度のなかで、ケアへの経済的サポートは必ずしも、ケア提供者のベーシックインカムからのみもたらされるものではないことである。サポートは、ケアを受けている人のベーシックインカムからももたらされる。すべての人の基礎的ニーズを満たすに十分なレベルのベーシックインカムを望むならば、子供やかなりのケアが必要な人々にとって適切なレベルは、どのようなケアが市場を通じて適切に提供されようとも、そのコストをまかなうに十分であるべきである。幼い子供の場合は、親が子供のベーシックインカムを育児や有償労働からの撤退をサポートするのに使えるであろう。<sup>(2)</sup> ベーシックインカムをこのように理解することは、幼い子供に支給されるレベルは、就学年齢の子供よりも高くなければならないこと、ケアが必要なその他の人々のベーシックインカムは、ニーズに関連した支出で補完されるか包含されるべきであることを示唆している。そのように考えられたベーシックインカムは、ケアの受け手が経験する権力上の不平等の問題に取り組むことの助けともなりうる。<sup>(3)</sup> そのようなモデルは、ベーシックインカムが「育児のワナ (childcare trap) (Robeyns, 2007) を生み出すことを避ける助けとなるであろう。「育児のワナ」とは、母親が有償労働に参加したり再開する意欲を厳しく挫くものことである。もちろん、この種のワナは既に、潜在的な所得が育児のコストを賄うのに不十分な母親にとって存在しており、その他のケア提供者にとっては、より実際的なものである。筆者は、扶助制度的なケアの代替としての、ケア提供者への高いレベルのベーシックインカムを支持するが、適切なベーシックインカムは、扶助的その他のケアの現在のコストをカバーするだろうと示唆しているだけである。この扶助が低い程、適切なベーシックインカムのレベルは高いものとなろう。

しかし、性別労働分離に対するベーシックインカムの影響はどうであろうか? 上述の一般的問題に戻れば、特に多数の女性が就労せざるを得ない、低賃金で搾取的な仕事のいくつかに比べてケア作業を、ベーシックインカムはより魅力的にすることによって、この性別労働分離を助長するリスクがあるように思われる。しかし、伝統的な性別役割分担が既に変化している社会状況のなかで、ベーシックインカムは、ケア作業を男性にとっても心地よいものとする方法でありうる。カギとなるのは、性差に関わる広い意味での思想状況である。ケア作業を行うのは女性の役割であるという信念は、労働の性別分離を維持するうえで、大きな役割を演じており、税や福祉給付以上にそれを支える多くの慣習や制度も同様である。ケア作業を男女で分担することが正しいことだとみなす文化的な変化は、それ故、ベーシックインカムが女性にとって男性よりも有償労働をやめるについて、辛うじて有利なものにする以上に、労働の分離を変える上ではるかに重要な方法と思われるので

ある。より一般的に、女性の運動、平等を求める運動の課題のひとつは、そのような変化を奨励することである (Baker 他、2004 年、pp. 218-228)。

(注2) ここには、ケア提供者資源口座についての Alstcott の提案 (2004 年) との類似性がある。ただし、Alstcott はこうした口座の使用を制限している。

(注3) これは、それ自体、追及に値する問題と交錯する。すなわち、ベーシックインカムを、障がいの社会的モデルを考慮して、障がい者との関係においていかに設計すべきかである。いずれにしても、適切な制度によって、障がいをもたらす環境によって過重される、障がいによる追加的コストを規定しなければならない。

- \* 障がい者向けベーシックインカムのなかに公式に組み入れられるか、補完的給付として扱われるか、
- \* 適格性と給付レベルがどのように決められるか、
- \* 給付が特定の使用目的に縛られるのかどうか、
- \* 給付を障がい者本人が管理するのか信託人が管理するのかを、どのような条件によって決めるのか、など。

これらのすべてはベーシックインカムを分析するうえでの重要な問題であり、障がい者とその個人的支援者との権力関係に影響を与えるものである。

### 3. ケアの商品化

Kathleen Lynch と Maureen Lyons はアイルランドにおける最近の実証的研究において、多数のケア提供者と受け手との間で「ケア対話」を行った。<sup>(4)</sup> 明らかになった中心的なテーマのなかには、かれらのケア関係は、従来は経済主体に起因するとされていた合理性とは大いに異なり、合理性を助長することによって支配されているという事実であった。非常に多くの場合、ケア提供者がケアの選択を行う理由は、しばしば彼ら自身への大きな物的負担を犠牲にしての愛と道徳的義務、子供、扶養配偶者や親のニーズを満たす代替の明らかな無さに関連していた。ケア提供者がそのケア作業への認識と物的なサポートを望んでいる一方で、その愛の労働の側面が不可分であるとも感じていた。彼らは、親密な他者に提供する時間と、いろいろな形のケアの助長に関わるエネルギーを必要としていた。ケア作業のこの部分は、親密さを定義する相互性、コミットメント、存在に基づくものなので、有償の形のケアは補完とはなるが代替できるものではないと考えている。男性のケア提供者との対話は、教訓的で、ジェンダーの構造における最近の変化を例証するであったが、性差的期待はケア提供を明らかに男性よりも女性に向けるものであった。このような考え方が広く受け入れられている社会において、労働の性別分離に対して、ケア提供者を有償労働に押し込みながらケアの外部化と商品化によって対応しようとする試みは、人間関係についての人々に深く染み込んだ理解に反するものであり、愛とケアのニーズを妨

げるものである。経済的利得よりもケアを優先させるケア提供者の意思に照らせば、そのような戦略は、労働市場からの退去のコストを耐えがたいレベルに上昇させることに依存している。ケアが女性の仕事だという考え方に挑戦する強力な論拠があることは勿論であるが、ケアの商品化に対する親近感と抵抗感の重要性に異を唱える論拠を見出すことはできない。こうした前提が置かれるならば、社会政策は、愛とケアに取って代わるのではなく、支えることでなければならない。

(注4) この「ケア対話」の結果は、Lynch et al. chs. 3-7, 10. 近刊予定に所載

#### 4. 結論

本論において筆者は、情動システムのなかでの労働、認識、資源、権力、ケアそれ自体の不平等の由縁を跡付けるために、平等性の多次元的な枠組みを使用した。情動上の平等性に焦点を当てたのは、その本来的な重要性の故でもあり、ベーシックインカムジェンダー平等への影響（例：Bergmann 2004年, p. 116）への他論者の対処が、所得と雇用を中心とした平等性という狭い概念を使ってなされているからでもある。ケアの仕事についてのフェミニストの戦略は、労働の性別分離と戦うべきであると論じたが、ケアの商品化の限界を認識しながらケアの仕事に認識し支援するべきとも論じた。また、ベーシックインカムがいかにこの戦略に貢献できるかを示すとともに、とくに2つの代替アプローチを凌ぐ利点を明らかにした。その2つとは、明らかにケア提供者を対象とする金銭的支援、より悪い意味では、彼らを有償労働に駆り立てることである。情動上の平等とは、ベーシックインカムと性的平等の関係の一つの側面にすぎない。より完全な対処は、その他の主要な社会システムにおける平等性に着目することであるが、男女間の多次元的不平等性をそれぞれのケースで確かめながら、その他の諸社会システムにおける平等性、ベーシックインカムがそれらに与える影響を確かめることが必要である。<sup>(5)</sup> 一つ確かなことは、社会全体での性間平等性を達成するには、ベーシックインカムを導入する以上が必要であることである。しかし、上述の分析が正しければ、ベーシックインカムはその目的に積極的に貢献することが可能である。

(注5) 例：ベーシックインカムの政治的影響に関する Pateman の議論（2004年）